

畫大家としては、Crutskhank Leech 氏等、此頃最も名あり Crutskhank 氏は一千七百九十二年九月生れた人であるが、十二三歳の頃より已に立派な挿畫家で、人を驚す程の作があつた、此の人達が挿畫の専門に學ぶべき必要を叫び、終に挿畫専門學校を建設した、此れが挿畫學校の初めである、一千八百三十三年に畫週報を發行し、引續きて *Once a week good words* 等の雜誌が無量十數種發行された。

○テニソン詩集 *Sixties* の發行された一千八百五十七年頃は、歐洲に於ける挿畫の全盛時代であつた、此頃挿畫を描きて後世に名を遺せし名家は Rossette millois, Hunt, Walker, Hanghtan Pinewell 等星の如く現れて最も全盛を極めたのである。

○佛國の全盛時代は一千八百三十年前後で英國は一千八百五十六年前後である、今は大西洋を越えて米國に移り、挿畫の全盛は全く合衆國の獨占となり終りたる觀がある。

○我が國でも書籍に挿畫をなすとは疾くより行はれてゐる、菱川師宣の伊勢物語の挿畫を初めとして一千六百九十五年即ち元祿八年には彩色印刷の法發見せられた、我が國の挿畫大家は菱川師宣、雛や立圃、鳥井清信、西川祐信を甫め、橋守國、清春、月岡舟下、北尾重政、歌麿、北齊、長谷川雪丹、英泉、眞虎、廣重等皆有名人である、以上唯だ概略を述べたのであるから其意り御一讀を乞ふ、尙ほ挿畫研究の方法及び前記の大家の作品を掲げるとが出來れば、追々號を逐ふて掲載する考へである。

靜物畫の話 (一)

大下藤次郎

△人體の研究が不充分では繪は畫けぬといふが、専門家以外の人には研究の機會も少ないし、さまで深く立入るには及ばぬ、其代りとして靜物寫生を充分研究されたい。

△殊に風景畫を描くには靜物寫生の素養が最も必要である。比較的容易なる靜物を主題として、其形態や、濃淡や、色彩等を研究し、物質を表出する手段を學び置くとときは、景色を寫生する上に非常の利益がある。

△靜物畫は、他の人物畫や景色畫に比して、繪畫としての價値は乏しい、古來その方面の大家もあつたが、それは僅かに五指を屈する程で、其製作品も有名なるものは澤山はない、そして歐米に在ては多く食堂の粧飾に用ひられてある、果物や野菜の類を寫したもので隨分眞に逼つた美しいものがある、現時花の描寫にて有名なる獨乙の Klein 氏の如きは靜物畫家の一人である。

△繪畫としては多く貴はれぬにも拘はらず、靜物畫は是非一通り學んで欲しい、春秋戶外寫生の好期は兎に角、風寒き冬の日や土燃ゆる夏の日、または五月雨の頃などこの研究によき時である。

△靜物寫生の繪畫研究に便利なるは、變り易き花の類を除き、その他のものは幾日も寫生を續ける事が出来る、それゆへ繪を學ぶ時間の少なき人でも、三十分なり一時間なり筆を執つて、また翌日迄その儘にして置てもよい、且形や明暗を研究するには夜分でも習ふことが出来る、燈下にては濃淡が強く現はるゝ爲め初學者には却て晝間よりも都合がよいのである。

△靜物寫生の材料は何でもよい、書物 文房具 ランプ 机等の手近の物から、花瓶 置物 香爐 盆栽等の座敷道具、茶器 鐵瓶 コツブ 炭取 團扇 火鉢 煙草盆、又は帽子 煙草入 鞆 傘 下駄 提灯 化粧道具 武器の類其他の勝手道具を始として、野菜 果物 花 魚類等皆好個のモデルである。

△モデルを置くには、長時間光線の變化なき場處を選ばねばならぬ。美術家の畫室は、通例三方を塞いで北の方に大きな窓を作つてある、それは日光が直射するゝなく終日同一の光線を受けるためである、又北窓のほかに、同じく北に面した天井から光りを取つてあるものもある。高い天井から來た光線は柔らかで人體寫生にはよいが、靜物寫生には北窓一方からの少しく強い光線の方がよい。

△西洋風の高い窓のある部屋なら其儘でよいが、日本室なら可成北向の明るい座敷を用ゐるとよい、他に光りの來る處があれば、襖なり屏風なりを圍ふて置けばよい、最も南向で日があたつて居ても、三時間なり四時間なり同じ度の光線を受けるとが出来るならそれでもかまはない、雨の日は何處でもよいのである。

△光線は必ずしも一方から来るやうにと限つた譯ではない、たゞ何れかの一方にして置くと、明暗の調子が判然と見えて稽古するのに都合がよいからである、光るものなどは諸處から光線を受けると、意外に面白い變化を呈する事があるから、少し進歩したら光線の取り方を自分で工風して見たらよい。

△室の大きさは、寫すべきものゝ容積によつて異ならねばならぬ、博物の標本を描くやうに目の前へ置いて研究するのではないから、モデルと畫者とは相想の距離をとらねばならぬ、方一尺位ひのもの物を寫すには三疊數程あればよいが、夫以上はモデルに比例して大なる室が入用である。

余は科學者の喜ぶやうな、標本的にわざとらしく特徴を見せたりする繪畫を好まぬ、故に何の草の葉は、上と下とでは九十度の角で並べせよとか、朴の葉の分脈の數が三十本なければならぬといふやうな、註文をしやうとは思はぬ、殊に秋夏と言はず、畫家が植物や森林を描寫するのは、多少空間の距離を置いて寫生するのである、遠近法の觀念に乏しい支那人すら、遠樹枝無しと説いてゐる程であるから、葉の一枚々々を千差萬別に描き別けうといふ如き、實際繪畫として起り得可らざる場合を、豫想して立論するのでは無い、只畫家が一本の樹なり、數百根の群落なりに對して寫生するとき、この自然物體の生の興味に、いかばかり同感して寫生してゐるかは、從來の製作品を觀て頗る疑問としてゐるところであつた、多數の畫家の描ける如き森林なら、團簇あり、堆積あり、群束あり、しかして個々の生命がない、化して幾斤の泥炭となる患ひがある、自然界のためには一大事件である。秋は植物が生死の巷に屹立してゐるときである、力あるものは力を用ひつくし、色あるものは色を匂はせてゐる、聲ある蟲は、その根元に今を限りと啼いてゐる、嚴肅の氣鞞々と肌に泌み入るのは、この生死の關門に立つときを以て然りとする、余は最後にいま一回絶叫する自然の生命を描くものは、是れ自然派の畫家なり、自然の生命に接觸したるとき、繪畫も亦立派に感情を有することが出来る。

しかして形骸ありての生命であるから、無論自然の生命なる語の中には、形や色の正しき描寫を、必要とすることは豫定せられてあらねばならぬ。(小島烏水氏、文庫)